

アイヌ民族の歴史と文化

第8回

ー〈ひと〉〈暮らし〉〈ことば〉からさぐるー

神謡—神々の物語



奥田 統己 (おくだ おさみ)

北海道博物館アイヌ民族文化研究センター非常勤研究職員
札幌学院大学人文学部教授

アイヌ語とアイヌ文学が専門です。とくに北海道南部のアイヌ語の発音と文法、アイヌ文学の地域差そしてアイヌ語を歌うときにリズムとメロディーに乗せる技法などについて調べています。

今回は、おもに神々のさまざまな体験を神々の視点から語る物語—神謡^{しんよう}—を取りあげます。神謡はアイヌの物語のなかでも、日本語訳などで早くから広く親しまれてきました。それは、比較的短くストーリー^{ちりゆきえ}がわかりやすいためでもあります。やはり知里幸恵（1903年幌別生まれ）が自らの伝承する神謡をローマ字で書き表し日本語の対訳を添えた『アイヌ神謡集』（郷土研究社、1923年、現在は岩波文庫版としても手軽に読むことができます）の存在が大きいです。

『アイヌ神謡集』にはあわせて13編の神謡が収められていますが、第1話「シマフクロウ神が自らをうたつた謡」は、シマフクロウの神が、もとは裕福だったが今は貧乏になっ



た家の男の子の獲物となってやり、その家をもとのように裕福にするという内容とともに、冒頭の句「シロカニペ ランラン ピシカン コンカニペ ランラン ピシカン」と、その日本語訳「銀の滴降る降るまはりに 金の滴降る降るまはりに」でも知られています。

「宝のしずく降る降る お金のしずく降る降る」

『アイヌ神謡集』第1話とよく似た内容の神謡を、日高の門別に生まれ育った鳩沢ワテケさん^{はとざわ}（1890年生まれ）も伝承していました。鳩沢さんの語りは次のように始まります（田村すず子編『アイヌ語沙流方言の音声資料2—近藤鏡二郎の録音テープに遺されたワテケさんの神謡Ⅱ』、大阪学院大学、2002年による）。

アピシカトゥアピシカ

レカン ハウエ

私が鳴く声は

アピシカトゥアピシカ

トミペ ラン ラン

「宝のしずく降る降る

カネペ ラン ラン

お金のしずく降る降る」

アピシカトゥアピシカ

セコン ネ ペコロ

と言っているような声で

レカナウエ アン

私は鳴いていた。

アピシカトゥアピシカ

エヌネ カネ

そうしながら

アプカサン アイネ

ずうっと飛んで

アピシカトゥアピシカ

アルパアン ルウエ

行くと

タニンネ コタン

大きい村が

アピシカトゥアピシカ

チシレアヌ

立ち並んでいた。

この神謡では「アピシカトゥアピシカ」という句が繰り返し表れていますが、その意味はよくわかりません。神謡は、ほとんどの場合このように、意味や物語の展開との関係がよくわからない句を、一行ごとまたは数行以上あいだを置いて、繰り返しながら語られます。こうした繰り返し句のことをアイヌ語で「サケヘ」あるいは「サハ」といい、日本語では「折り節」などと呼びます。この折り節を伴って語られることが神謡の大きな特徴だということもできます。

さてこの神謡では「アピシカトゥアピシカ」というサケへのほかに、「トミペ ラン ラン カネペ ラン ラン」が、シマフクロウの神の「声」として語られています。この部分が『アイヌ神謡集』第1話冒頭の「シロカニペ ランラン ピシカン コンカニペ ランラン ピシカン」という句と音も意味も類似していることは、すぐに気づくことができるでしょう。この句は、通常の折り節のように一行または数行おきに繰り返して歌われたとも考えられますが、そのあとの文中にも4回、いずれも直後に「という歌を歌いながら」という表現を伴って表れることもあり、むしろやはりシマフクロウの神のセリフや「歌」として物語中の特定の箇所だけで語られたのではないかとする説もあります。仮にそうだとすると、通常の折り節のほうかどのようなものだったのか、そもそもこの神謡に通常の折り節があったのかは、有名な物語であるにもかかわらず現在のところ謎のままです。『アイヌ神謡集』の「ピシカン」の部分が、鳩沢さんの神謡では折り節のほうの「ピシカ」という部分と類似していることが、この謎を考える手がかりになるかもしれません。

神謡にかぎらずアイヌの物語や歌謡には、同じような折り節や内容を持つものが、北海道／樺太の広い範囲に伝承されていることがあります。そうした各地の伝承を聴き比べたり、文字に書かれたものを読み比べたりすることで、アイヌ文化が地方ごとにさまざまに展開したこと、さまざまな語り手がさまざまな物語を語っていること、そのなかで物語に描かれる神々や人間たちの行いや世界観もまたさまざまであることに、触れることができるでしょう。

神謡のアイヌ語での呼び名も地域によってさまざまで、日高の静内などではカムイユカラ、鳩沢ワテケさんの生まれた沙流川下流域や千歳市ではカムユカラともいい、知里幸恵の生まれた地域ではカムイカラとさらに短くなります。

また上川、十勝、釧路さらに樺太にはオイナという名称が広がり、沙流川の中流域ではメノユカラ、類似周辺ではトゥイタク、釧路ではマツユカラ、美幌ではサコラウとも呼ばれます。こうした違いが単に名称だけのことなのか、物語の内容にも地域差があるのか、どのような経緯でこうした名称の違いが生まれたのか

などは、アイヌ文学・アイヌ文化の歴史を考えるうえでの大きな問題です。

神謡を語る神々

ここで、前頁で紹介した鳩沢ワテケさんのシマフクロウの神謡のあらすじを改めてご紹介します。

『宝のしずく降る降る お金のしずく降る降る』のように私は鳴きながら飛んでいき、家の立ち並ぶ大きな村のはずれにある木の枝にとまった。私を射止めようとおおぜいの身なりのよい子どもたちが集まったが、そのなかにみすぼらしい服装をした男の子が一人混じっていて、みなに馬鹿にされたり叩かれたりしていた。子どもたちの出自を私が見通すと、身なりのよい子どもたちは成金の家の子で、みすぼらしい服装の子はこの村の村長の孫だったが、村長が亡くなったあとお祖母さんと暮らして不自由をしていることがわかった。そこで、成金の子どもたちが放つ矢を私は避け、もとの村長の孫の矢に私はあたってその子の獲物になった。その子が私を抱えて家に帰ったのを見たお祖母さんは「神様が^{まつ}見守ってくださいったのです」と言い、私を^{まつ}祀った。そこで私は「もともととお前の家にあった宝物を成金たちが持って行ったのを、お前が取り戻して村長になるように見守ってやる」と夢を見せた。その子は成長して狩猟も巧みで勇敢雄弁な若者となり、村長になった。それから私は神の鳥として祀られている、とシマフクロウの神が物語った。

神謡の内容は、この物語のように、さまざまな神々が人間たちを見守ったり罰を与えたり、あるいは悪さをして苦しめたり、ときには人間に懲らしめられたり、場合によっては神々どうして結婚したり争ったりした自らの体験を物語るというものが大半です。シマフクロウ、カケス、クマ、キツネ、あるいはクモやキリギリスといったさまざまな神々が、鳥や獣や虫などの姿をとって人間界に現れるようすを語る神謡もあります。立ち樹の神が人間に伐採されて舟となり交易を助けるようすを語ることもあります。ふだんは^{ししゅう}刺繍に余念のない火の神が、^{ききん}飢饉から世界を救うことで神々からも人間からも^{うやま}敬われるようになった体験を物語るこ

ともあります。

こうした神々をアイヌ語では「カムイ」と言います。動植物や火のような自然現象だけではなく、舟や家、儀式に用いる道具などもカムイです。いっぽう水そのものはカムイではなくワッカウシカムイ（水の神）の母乳であるとする伝承や、動物でもシカ、サケ、カエルあるいはカニなどはカムイではないとする伝承もあります。カムイの存在や力は信仰として教えられてはじめて人間が知ることができるのであり、けっして近代の非宗教的な概念としての「自然」や「環境」を神格化したというようなものではありませんし、たとえば「人間にない力を持ったものすべて」というように簡単に定義することもできません。

「カムイ」をアイヌ語でそのまま使う用法も広まっております、もちろん原語でそのまま意味が理解できるのならばよいことです。ただしせつかく原語を用いても、それが「自然」などの概念に置き換え可能だと理解してしまっはなんにもなりません。日本語の「神」という語は、神道の神々やキリスト教のような一神教の神など、それぞれの信仰に応じて多様な意味を持ってきました。「カムイ」に対する信仰心を想像しつつ日本語に訳すならば、より適切な訳語はやはり「神」だということになるでしょう。

神謡の多様性

前頁でも説明したとおり、大半の神謡の内容は神々が自らの体験を物語るというものであり、また形式上の大きな特徴のひとつは「サケへ」あるいは「サハ」などという折り節を伴って語られることです。しかしなかには、人間の体験談なのに折り節を伴って語られる物語もあり、また折り節がなくても語り手が「カムイユカラ」のように呼んでいる伝承もあります。

たとえば旭川の鹿田シムカニさん（1887年生まれ）が、以下のような内容の物語を「フンナ アオー」という折り節を伴って語ったという記録があります（久保寺逸彦編著『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』、岩波書店、1977）。同じような物語は門別や千歳など各地に伝わっています。

私は一人で毎日刺繍をして暮らしていた。ある日一人の若い男が現れて私の夫となり、熊や鹿などを獲ってくるので不自由なく暮らしていた。しかしあるときからカッコウが屋外の祭壇にとまって夜も昼も鳴くようになると、それ以来夫は

何も食わず考え込むようになった。やがて夫は『実は私は雷の神の6人兄弟の末っ子で、お前に惚れたので下界に降りてともに暮らしていた。しかし兄たちがカッコウを遣わして私に命じるので、私は天に帰らねばならない。これからは、雷の最後に激しく鳴るのが、妻と引き裂かれて怒っている私の雷鳴だ。そこで戸外に出てくれれば、私はお前の姿を見ることができる。6年後には人間の夫を得るだろうから幸せに暮らしてくれ』といい、大きな鳥の姿になって窓から飛び去った。そのうち雷鳴が近づいてきたので、最後に激しく鳴ったときに私は戸外に出て夫に自分の姿を見せるようにした。6年経つと若い男が現れて私と夫婦になり、不自由なく暮らして子どもも生まれたが、雷が鳴れば私はいつも外に出て、神の夫に自分の姿を見てもらって嬉しく思っていた。やがて私は歳を取り、あの激しい雷鳴は私の夫だった雷の神なのだと、子どもたちに語り遺して死ぬのである、と人間の女が語った。

また日高の静内に生まれ育った織田ステノさん（1901年ごろ生まれ）は、「ハナカッコク」という折り節を持つ次のような内容の神謡を語っています（静内町教育委員会編『静内地方の伝承Vー織田ステノの口承文芸（5）ー』、1995年）。

私はカッコウの姉さんに育てられていた。ある日姉さんは『私はもともとお前の父親を見守っていたのだが、出産のために数年目を離しているうちにお前の両親は殺されてしまった。そこで残されていたお前を今



まで育てていたのだが、私はもう天の国に帰らなければならぬ』といい、まだ小さい私も天の国に連れて行った。そこには姉さんの子どもたちがおおぜいいて、私に『母さんがお前ばかり可愛がるから早く人間の国に帰れ』と言って意地悪をする。やがて姉さんは私を地上に連れて降りて『あなたの仲間の人間がこの村に集まるようにするから、両親の仇をとりなさい』と言って天に帰っていった。やがて集まってきた若者ととともに、私は両親の仇をとり宝物を取り返してきて、姉さんをはじめ神々を祀り両親を供養した。やがて女たちもやってきて、私たちはそれぞれ妻をめとり、それからは子どもたちに『カッコウの姉さんのおかげで私は生きながらえたのだ、けんかをするな』と言い残して死ぬのである、と人間の男が語った。

このように、折り節を持つ神謡の形式で語られなおも人間を主人公とする物語が地域を越えて広がり、また類似した内容を持つものもあるということは、たまたまのできごととしては説明できず、もともと神謡の内容やそれを特徴づける折り節の成り立ちがさまざまであったことを示唆しています。

平取の貝沢こきんさん（1897年生まれ）は、以下のような短い伝承を「ポン（小さい）カムユカラ」（小さい神謡）と呼んで、節をつけて語っています（田村すず子編『アイヌ語音声資料5』、早稲田大学語学教育研究所、1988年、一部改訳）。

氷の上で小さな狼の子が転んだ 氷が偉いからさ
氷が偉いとはいえ太陽が溶かす 太陽が偉いからさ
太陽が偉いとはいえ上を雲が通る 雲が偉いからさ
雲が偉いとはいえそこから雨が降る 雨が偉いからさ
雨が偉いとはいえ地面にぶつかる 地面が偉いからさ
地面が偉いとはいえ木が生える 木が偉いからさ
木が偉いとはいえ人間に切られる 人間が偉いからさ
人間が偉いとはいえ死んでしまう
人間は偉いからこそ フッフッと息を吹きかけると生き返るのさ

このように節をつけて語られ問答形式の内容を持つ短い伝承については、知里幸恵の弟でアイヌ語研究者

の知里真志保が「ウパラパクテ 口くらべ」と呼ぶ遊び歌だとした説明がよく知られています。しかし実はさまざまな呼び名があり、貝沢こきんさんのほかにも複数の語り手が「カムユカラ」などと呼んだ記録のあることが、当センター研究職員によって報告されています（大谷洋一「オンネパシクルについて」『口承文芸研究』19、1996年）。



アイヌ文化の多様性へ

すでにこの連載でもご紹介しているように、北海道博物館では今年度10月から12月にかけて「アイヌのくらし—時代・地域・さまざまな姿」と題する企画テーマ展を開催しました。この文章が掲載されるころにはちょうど群馬県立歴史博物館で同じ展示が始まっていますので、北海道で見逃したかたも群馬に行く機会があればぜひそちらをご覧ください。

そこでの視点のひとつが、「それぞれの地域で微妙に異なった歴史的背景と人びとの歩みを示すことで、画一的な『アイヌ文化』像を再生産するものとならないよう注意を払う」ことです（大坂拓「序 歴史の中の『アイヌ工芸』」、同展図録）。

神謡をはじめとする口頭伝承にも地域ごと、個人ごとのさまざまな多様性があり、画一的に「神謡とはこういうものだ」と考えたり、そのなかで語られる神々について「ひとこと」で理解したりすることはできません。読者の皆さんのなかに、これまで持っていた神謡のイメージにとらわれずにいろいろな物語を読んだり聞いたりしてみたいと思った人がおられるなら、本稿の目的の一端は達せられたことになります。